

2026年7月28日

発行 白百合女子大学児童文化研究センター

〒182-8525 東京都調布市緑ヶ丘1-25 TEL 03-3326-7994 FAX 03-3326-1319

<https://www.shirayuri.ac.jp/course/childctr/index.html> e-mail: jido-bun@shirayuri.ac.jp

編集 白百合女子大学児童文化研究センター



新センター所長挨拶

山中智省

二〇二六年四月、新たにセンター所長を拝命いたしました山中智省と申します。白百合女子大学に着任してからまだ三年目という若輩者の私が、歴史ある児童文化研究センターの、しかも、児童文化学科の礎を築いた先生方が代々担われてきた任に当たることに対し、非常に大きな責任を感じております。経験不足の身ゆえに至らぬ点も多々あるかと存じますが、精一杯努めて参りますので、どうぞよろしくお願いいたします。

さて、センター所長を拝命したタイミングは期せずして、センターやその周辺環境が大きな「岐路」や「転機」を迎えるであろう直前の時期となりました。

まずは大学の改組です。白百合女子大学は現在、二〇二八年四月の新学期設置に向けて準備を行っております。今回の改組は、少子化などに伴う受験者数の減少に伴い、大学業界全体が年々厳しい状況に置かれるなか、大学や学科がこれまで以上に魅力を高め、新たなスタートを切るための施策となります。だからこそセンターも大学の附属施設の一つとして、その実績や存在意義をあらためて社会に示すとともに、施設の維持・存続に向けた対応を模索し、積極的に実行していくことが求められるでしょう。

また、来年は児童文化研究センターが設立三十五周年を迎えます。センターの設立は一九九二年四月のこと。以来、運営に尽力されてきた先生方や助教・助手の方々、研究活動を盛り上げてくださった構成員の皆様のご協力により、児童文学・文化の研究に多くの実績を残しつつ今日に至っています。そして、次の五年、十年の歴史を積み上げていくためにも、大学の改組を前にした三十五周年の節目はセンターにとって、そのあり方をいま一度考える好機となるはずです。

以上を踏まえるならばセンターは今後、蓄積されてきた知識、情報、資料の数々を研究に利用できる環境を整備し、児童文学・文化の研究拠点としての地位をより確かなものにするとはもちろん、学科や大学院との連携を強化し、大学の附属施設としての「地盤固め」を図ることが必要になるでしょう。さらには、センターの存在や役割を広く社会に知ってもらうためにも、積極的かつ効果的な情報発信や広報活動（PR活動）が不可欠になります。

なお、PRの面では今年二月、SF研究家であった故・星敬氏の旧蔵書の一部である集英社コバルト文庫（約二三〇〇点）の寄贈受け入れを発表し、SNSを中心に大きな反響を呼びました。また、五月に本学で開催したコバルト文庫創刊五十周年記念シンポジウムでは、寄贈本の管理を担うセンターにも注目や期待が集まりました。これを契機に既存の三文庫をはじめセンターの活動全体への興味関心を高めていければと思います。その意味では幸先の良い新年度のスタートとなりました。

児童文化研究センターを、児童文学・文化に関わる研究・教育にとってさらに有意義な場としていくこと、そして、その維持・存続のために必要な対策を柔軟に

講じていくこと——。これが私自身の目標となります。まだまだ試行錯誤の段階ではございますが、目標達成のため、微力ながら職務に邁進したく考えております。つきましては引き続き、皆様のご支援・ご協力を賜いましたら幸いです。重ね重ね、どうぞよろしくお願いいたします。

〔本学准教授・所長〕

二〇二六年四月、白百合女子大学児童文化研究センターは、新所長、新任の所員の先生方、そして新しいスタッフを迎え、新たな気持ちで業務に当たることとなりました。今号の『白百合女子大学児童文化研究センター報』は、新たに着任された方々のご紹介を中心に、お届けいたします。



【写真】

（上）児童文化研究センター入り口

（下）整備中のコバルト文庫書架

なお、今号掲載の「コバルト文庫の寄贈報告」で、整備の経過報告をしています。詳しくは、五〇六〜五〇七頁をお読みください。



新任の先生の紹介

二〇二六年四月、藤本恵先生とチェステイブン先生が本学児童文化学科に着任され、児童文化研究センターの所員となりました。

そこで、両先生にご寄稿をお願いし、自己紹介をしていただきます。

小さいものが好き

藤本恵

いま、私は自分のいちばん好きなこと、つまり児童文学にかかわる仕事をしています。でも、十代の間は長いこと児童文学からはぐれていました。読書の黄金期は小学生のころ。児童書でいっぱい学校の図書室は、ワンダーランドでした。中学生になると、児童書を読むのは恥ずかしいような気がして、大人向けの小説に手を出すものの、つまらない。何を読めばいいかわからない……。

それでも本が好きという気持ちは変わらなかったのですが、大学は、いちばん本の読めそうな国文学科のあるところに行こうと決めていました。私が受験をしたのは、一九九〇年代のはじめです。AIにたずねることはもちろん、ウェブ検索すらできませんでした。高校は放任主義で、進路指導などほとんどしてもらえません。オープンキャンパスもありませんでした。地方の高校生だった私は、白百合女子大学に児童文学の学べる学科があることを知らないまま、

学費の安い国立女子大学という条件で進学先を選んだのです。私はそこで、つまらないと思っていた日本の近現代文学のおもしろい読み方を教えてもらいました。

それでも、読書の黄金期への思いは消えませんでした。同じ大学ではあるけれど違う学部にあった児童学科に出張つていて、本田和子先生の児童文化論を聴講しました。（そのとき、「助手の森下さん」として授業の準備などされていたのが、森下みさ子先生です。）児童学科は、学内で一番古い建物のなかにありました。床は板張り、歩くときギシギシ音がします。小学生のときに使った鉛筆のようなにおいのする木の教室で、少女のような声で少女を語る先生を見つめていました。あまり優秀な学生ではありませんでしたから、ご講義の内容はすっかり忘れてしまいました。でも、本田先生のお声を聞きながら、自分のなかの古い、深いところに潜つていて、教室を出るとき、足のふらつくことがありました。外の世界にうまく戻ってこれなかったのだと思います。

ある日、ギシギシ音をさせながら教室を出て、ふらふらと校門に向かう銀杏並木を歩いていたとき、とつぜん頭のなかに「小さいものが好き」という声がひびきました。とるにたらないささやきのようですが、私にとっては天啓でした。自分の関心が、どうしても大人ではなく子ども、文学ではなく児童文学に向かうこと。「ちひさきものはみなうつくし」と書いた清少納言を、他人とは思えなかったこと。思いあたることはたくさんあるのに、自分にとって何が大切か気づくまでに、ずいぶん時間がかかってしまいました。

その後は、意識して小さいものに関心を向けるようになりました。国文学徒のなかで堂々と児童文学を研究するようになり、大好きな先生に「児童文学を研究する人は、近代文学を知っておかなければいけないよ」と言われて、首

をかしげるようにもなりました。先生のおっしゃることは正しいのですが、でも、なぜ先生は「近代文学を研究する人は、児童文学を知っておかなければいけないよ」とはおっしゃらないのだろう、と思ったのです。小さいものを大きいものの下に置こうとする社会のありように、「小さいものが好き」という感覚をよりどころにして、抗いたくなくなっていました。

そして今年、長い遠回りをしましたが、やっと児童文化研究センターのある白百合女子大学にたどり着きました。この小さくて大切なものを守り、輝かせることができるよう、力を尽くしたいと思っています。

〔本学教授・所員〕

夢の叶え方

チェステイブン

世の中には様々な夢の形と、その叶え方があると思います。子どもの頃にぼんやりと描いた膨大な夢や、大人になりたての頃に自信に溢れて何でも出来ると思った無謀な夢、誰にも言えないようなちっぽけで下らない夢など。私は飽きっぽい性格で、夢をコロコロと変える、夢浮浪者でした。英語でドリーム・ワンダーラーというと、なんだかかっこよく聞こえますが、ただのろくでなしです。

しかし、一九歳くらいの頃から一度も変わらないことがあります。それは日本へのあこがれです。理由はよくわかりませんが、「日本」という場所に行きたい。日本語で日本に住んでいる人々と話してみたい、という思いが、心の奥に根付いて、なかなか消えなくなりました。おそらく当時観ていた映画やドラマ、聞いていた音楽と関係があると思います。そのなかでもジブリの存在が大きかったのは

確かです。小津安二郎の白黒映画と宮崎駿のハウルやトトロを交互に観るような、ヘンテコな青春でした。

おそらくピーターにとつてのネバーランド、アリスにとつてのワンダーランド、アリエルにとつての人間世界は、私にとつて日本だったようです。大人の世界に入る日を待つ子どものように、日本で暮らせる日をずっと待っていました。

そういう得体の知れない憧れに駆られていたせいか、カナダで大学院に入った時に選んだ研究テーマは児童文学でした。もちろん日本の児童文学です。当時は、誰もがそんなテーマは聞いたことがないというほど、海外の日本研究のなかでは珍しいトピックでした。修論の対象に石井桃子を選んだのも、彼女が日本の子どもたちのために夢見ていた新たな文化への希望がどこか自分の感覚と共鳴していたからかもしれません。

アメリカの大学の博士課程に入ってから、希望の職場は日本の大学一択でした。そして、いつかは忘れましたが、研究の途中で白百合女子大学の存在を知りました。児童文化学科という、夢の国にしか存在しないような学科があるを知った以上、どんなものか自分の目で見ずにはいられません。細かい経緯は省きますが、ご縁があつて初めて訪れた白百合女子大学の第一印象は「森」でした。パーネットの『秘密の花園』のような木々で隠れている場所。心の安らぐ、健康に良さそう(?)な場所だと思いました。

前世にどれだけ良い行いをしたのか、日本に住む夢も、白百合女子大学で働く夢も、今年叶いました。自分で何か特別なことをしたというより、ぼんやりと憧れを追いかけていたら、いつの間にか視野が開けて、マッドハッターやチェシャ猫の住む世界に入り込んでいたという感覚です。

今教えている授業では、ファンタジーについて考えるこ

とが多いですが、ファンタジーはこのようにいつも現実と深くつながっているんだなと常感します。私を感じたような憧れを子どもたちにも感じてもらうためにはどのような文化が必要か。夢や幻想を捨てることで大人になるのではなく、心の中のファンタジーを大人としての強さにも出来るのだと伝えるにはどうすればよいか。そんなことが真剣に考えられる場所にいることを許されたことを、心から感謝しております。

〔本学講師・所員〕

新たに着任したスタッフの紹介

「今度の『センター報』の『構成員活動紹介』はぜひ、南口菜々さんをお願いしましょう」と話していたところ、ご縁あつて南口さんがセンター助手となることが決まりました。そこで、今号の「構成員活動紹介」は急遽、「新たに着任したスタッフの紹介」に切り替え、南口さんに自己紹介をお願いすることにいたしました。

がんばります

南口菜々

はじめまして、またはご無沙汰しております。四月から児童文化研究センター助手に着任いたしました南口と申します。

現在私は、主にコバルト文庫の受け入れ作業を進めてい

ます。

本だけでなく、帯や葉、小冊子などが大変綺麗な状態で残っているものが多く、それぞれ刊行時の様子を窺い知ることができます。この貴重な機会に携わることができ、大変ありがたく感じております。今後とも誠心誠意取り組んでまいりますので、これからどうぞよろしく願っています。

私は元々、勉強が大の苦手なのに「児童文学って、面白そう!」という勢いだけで白百合の大学院に来た学生でした。先生方、友人、先輩、後輩、センターの皆様には、本当にたくさんたくさん助けていただきました。

皆様のあまりのあたたかさに「おかしい……何か裏があるのではないかと疑ったほどです。裏はなかったです。

そんなわけで、人生で一番勉強したなあというくらいには自分なりに頑張って、なんとか修了したような人間が私です。なので、まさか自分がセンターの一員として働く日が来るとは思っていませんでした。こちらを書いてるのは六月、働き始めて三か月ほどですが、いまだに「なぜ私がここに……?」と戸惑っています。

自分が白百合でいただいた沢山のものをお返しできたらしいのですが、おそらくあの頃お世話になった皆様と同じレベルのものなんて、今の自分ではとても追いつけないのです。

しばらくは不慣れで多方面にご迷惑をおかけしてしまいかもしませんが、早く仕事に慣れ、私なりに尽力していきたいと考えております。修士を修了後は図書館の児童サービスを担当しておりましたので、その経験もどこかでお役に立てることがあれば幸いです。

改めまして、今後ともどうぞよろしく願っています。

〔センター助手〕

センター主催講演会報告

二〇二五年度は第七十六回研究会といたしまして、比較文学・児童文学が専門である佐藤宗子先生をお招きし、ご講演いただきました。
講演会にご参加いただいた皆様に、心よりお礼申し上げます。

第七十六回研究会 佐藤宗子先生講演会

講演者 佐藤宗子先生（千葉大学名誉教授、元日本児童文学学会会長、アジア児童文学日本センター会長、本学非常勤講師）
題目 ミステリから見る〈子ども〉——人物造型・語り・「子ども」観——
日時 二〇二六年三月七日（土）十三時～十五時
会場 白百合女子大学クララホール（十一号館三階）
司会 酒井志麻氏（本学助教）
* 肩書等は当時のものです。

佐藤宗子先生の講演会に参加して

深見けいと

二〇二六年三月七日、佐藤宗子先生の講演会、「ミステリからみる〈子ども〉——人物造型・語り・「子ども」観——」が開催されました。

今回、先生はミステリの中でどのように子どもが描かれるのか、その課題とは何かについてお話ししてくださいました。まず、ミステリの特徴として無意識の固定観念を揺さぶる役割があること、その中で描かれる子どもはどのような役割を負ってきたかを提示されていました。

さらに、子どもは大人と比べ、弱い立場にあることを活かした作品があることを多様な例とともにお話してくださいました。一方で、その立場を逆転させ、子ども自身が優れた推理を発揮し、事件を解決する作品や、大人社会の枠外にいる子どもという立場を活かした作品があることを示されていました。

また、課題として、子どもが登場人物であるという性格上、探偵する行為の前提が必要であり、巻き込まれ型の作品が多いことをお話くださいました。特に興味深かったのは、子どもの悪の描かれ方についてのお話でした。そこで、子どもが持つ不条理性と犯罪との境目のあり方とは何かという問題が示されていました。子どもというと純粋無垢というイメージが強いですが、実際の子どもも、作品に登場する子どもも、純粋無垢なだけではありません。しかし、子どもは庇護される、成長していく存在でもあります。悪を描くミステリにおいて、子どもの悪をどこまで追求するののか、そして追求すべきなのかは改めて難しい問題だと感じました。

今回の講演会で特に印象に残ったのが、子どもの描き方

に、子どもが何を象徴するものとされているかが現れるという点です。そこには作者の子ども観が反映されるとともに、一般読者に訴えかける子ども像となっているとお話されていました。私は普段、文学作品を読んでいく際に、登場する子ども像がその作品の当時の読者に受け入れられるもの、望まれているものとして書かれているという点にはなかなか目を向けられていなかったので、大変勉強になりました。このような貴重な機会をいただき、ありがとうございました。

〔博士課程（後期）在学中〕

佐藤宗子先生は、本学児童文化学科および大学院児童文学専攻にて長年、日本児童文学に関する授業をご担当され、本学での教育にご尽力くださいました。二〇二五年度はその最終年度でした。

佐藤先生、長い間本当にありがとうございました。

コバルト文庫の寄贈報告

「新センター所長挨拶」でも紹介がありました通り、白百合女子大学は、SF研究家の故・星敬氏旧蔵の「コバルト文庫」少女小説作品群の寄贈を受けました。受け入れ先は児童文化学科および大学院文学研究科児童文学専攻で、今後の管理・運用を児童文化研究センターが担います。

資料受け入れに関わってくださいった全ての皆様に、心

より感謝申し上げます。

現在、児童文化研究センターでは、二三〇〇冊あまりの受け入れ作業を進めています。ここからは、受け入れ作業の経過報告をいたします。

二〇二五年度内に資料の搬入が完了し、現在進行中の受け入れ作業は、おもに、①資料と共にいただいた書誌情報データをもとに、資料目録を作成すること、②冊子本体の装備、③帯・広告・葉を記録しつつファイルに収めて整理するという三点です。

資料目録データおよび、実際にコバルト文庫を排架する資料室の本棚では、一冊一冊の文庫本を、まずは作家ごとに整理した上で、さらにシリーズごとに分類します。同一作家の異なるシリーズが並行して刊行されることも多く、その場合には、シリーズごとに資料をグルーピングするところから目録作業が始まります。また、作品タイトルのつけ方も実に多彩で面白いのですが、利用者が閲覧を希望する作品(資料)を確実に手に取るためには、統一された資料目録のフォーマットに落とし込むことが求められます。冊子本体の整備としては、ビニールのカバーをかけて表紙の汚損を予防するとともに、現時点での資料の状態を記録します。良好な状態で資料を保存するための準備に努めています。

スタッフの自己紹介記事で南口さんが指摘したように、「本だけでなく、帯や葉、小冊子などが大変綺麗な状態で残っているものが多く、それぞれ刊行時の様子を窺い知ることができ」という点は、個人が大切に保管してきたコレクションならではの特徴です。散逸しやすいこれらの貴重な附録の情報を目録に記録し、ファイルに整理していくことも、今回の資料受け入れの重要なパートです。

ご利用いただける日を楽しみに、日々、作業を進めております。



プロジェクト活動報告

児童文化研究センターでは、センター構成員による研究の促進を目指し、プロジェクト制度を設けています。二〇二六年度は、次の四つのプロジェクトが活動しています。

小波日記研究会（小波日記を読む）

（研究代表 猪狩友一）

巖谷小波日記（センター所蔵の複写資料）の翻刻・研究を継続しています。主に手書きの日記本文（くずし字）の解読と翻刻案の確認・修正を行っています。二〇二五年度は明治三十九年七月～八月の日記の翻刻と注釈を、センター論文集に発表しました。現在、明治四十年八月あたりを読み進めています。およそ月一回のペースで研究会を開いています。この時代の文学・文化に興味がある方のご参加を歓迎します（くずし字が読めなくてもOK）。新規の場合は、猪狩までメールで申し込んでください（メールアドレスは児童文化研究センターにお尋ねください）。

近現代児童詩歌研究

（研究代表 宮澤賢治）

『児童詩歌』は、二一号となりました。「佐藤泰平「宮沢賢治の音楽」(一九九五/三筑摩書房)から知る賢治童話挿歌」は、佐藤の論考から賢治童話と音楽の結びつきを検討しています。「竹久夢二『ねむの木』に関する研究ノ

ト」は、わらべうたを採録した『ねむの木』の構成・形式を確認し、口絵や挿絵といった夢二の図像の意義を論じています。「中川ひろたかの「新しい子どもたちの歌」研究(二)」は、「月刊クローヨン」発表作品のジャンルの多彩さ・オノマトペに注目し、言葉と音楽が響きあって生まれる歌の経験について捉えています。

ちりめん本研究

（研究代表 水間千恵）

本プロジェクトは大学図書館所蔵のちりめん本について研究することを目的としています。各自がテーマを設定して研究を進める他、メール等で情報交換をしています。昨年度は、尾崎るみ監修、浜名那奈訳「ちりめん本海を渡った日本昔ばなし」(Japanese Fairy Tales)「ちりめん本 小泉八雲のふしぎな昔話」(Japanese Fairy World by Lafcadio Hearn)（東京美術）が刊行されました。また尾崎るみが『児童文化研究センター研究論文集29』に「長谷川武次郎の「日本昔噺」シリーズの最終形——第21号『鏡』(Three Reflections)からラフカディオ・ハーンの『若返りの泉』(The Fountain of Youth)まで」を発表しました。本年度も各々のテーマで研究を進めます。

絵本研究会

（研究代表 水間千恵）

本プロジェクトは、図書館や託児施設以外の場所における絵本書架の設置や絵本展示活動を支えるための専門的知見の開拓を目指して、調査・研究を行っています。昨年度は、外部施設や白百合女子大学図書館での絵本展示や、絵本に関する研究発表などを行いました。また、分科会を

設置し、外部施設で配架した絵本からのキーワード抽出の実践や、絵本を対象とした書評の執筆と検討、研究的視点で一冊の絵本を複数人で読み、意見交換を行うといった活動を実施しました。今年度は、これまでの活動の継続およびその検討などを行う予定です。

プロジェクトへの参加を希望される方は、センターまでお問い合わせください。



センターからのお知らせ

小澤俊夫先生のご逝去

二〇二六年四月十八日、本学元教授の小澤俊夫先生が亡くなられました。小澤先生は一九九六年四月から二〇〇一年三月まで児童文化研究センター所長を務めました。心よりご冥福をお祈りいたします。

プロジェクト成果物の電子公開

二〇二四年度より、白百合女子大学ウェブサイトにて、プロジェクト成果物を電子公開しております。

【公開中の成果物】

○「近現代児童詩歌研究」

・『児童詩歌』第一六〇二二号 電子版

(二〇二〇～二〇二五年度成果物)

○『神宮輝夫先生のお仕事を振り返る』研究会

・雑誌記事執筆時期タイムライン

・「神宮輝夫執筆等記事リスト」

・『日本児童文学』特集名・編集委員「一覧」ほか

(二〇二三年度成果物)

成果物はPDFでご覧いただくことができます。詳細は、「児童文化研究センター／プロジェクト／プロジェクト成果物」のページをご覧ください。

<https://www.shirayuri.ac.jp/course/childctr/project/results/>

センター研究会

児童文化研究センターでは、「児童文化研究センター研究会 前期／後期 発表会」といたしまして、「大学院生研究発表会（博士論文構想発表・修士論文中間発表／修士論文発表）」と「構成員研究発表」を前期・後期に分けて行っております。

今年度前期発表会は八月三日（月）を予定しております。詳細は、児童文化研究センターホームページをご覧ください。

<https://www.shirayuri.ac.jp/course/childctr/study/>

皆様のご参加を、心よりお待ちしております。

先生方のご近著

二〇二五年六月から二〇二六年五月までに刊行された、児童文化学科専任の先生方のご近著をご紹介します。

(敬称略)

○山中智省「第9章 「面白ければなんでもあり」な活

字コンテンツの展開」永田大輔・近藤和都編著『雑誌利用のメディア社会学―文化を可能にする「工夫」』ナカニシヤ出版、二〇二五年六月

○やたみほ『アメチャウ国の王さまとひみつのカフェ』瑞雲舎、二〇二五年十一月

○山中智省・嵯峨景子共同監修『ライトノベル雑誌・少女小説雑誌目次集成』皓星社、二〇二五年十二月

○森下みさ子『ブリキユアの戦い方とジェンダー―無敵な「かわいい」』アウリオン叢書 24 交差点としてのジェンダー

○水間千恵「絵本とジェンダー」『アウリオン叢書 24 交差点としてのジェンダー』弘学社、二〇二六年三月

児童文化研究センターブログとX

児童文化研究センターブログは二〇二六年で開設一五年を迎えます。引き続き構成員の皆様のご投稿を受け付けるとともに、センターからの情報発信をいたします。

ブログ URL: <https://jido-bun.blogspot.com/>

センターによる発信は月二回程度、構成員の投稿は随時（いずれも学期期間中）行なっております。ぜひチェックしてみてください。

また、二〇二四年度より、児童文化学科研究室と共同アカウントでXの運用を行なっております。アカウント名は「公式」白百合女子大学 児童文化学科／児童文化研究センターです。

アカウントをお持ちの方は、ぜひフォローしてください。

X URL: <https://x.com/jibunken>

Xアカウント: @jibunken



センター構成員一覧

(二〇二六年七月現在・敬称略)

所長

山中智省

運営委員

チエステイブン トミヤマユキコ

藤本恵 間宮史子 水間千恵

森下みさ子 やたみほ 山中智省

所員

猪狩友一 チエステイブン

トミヤマユキコ 藤本恵

間宮史子 水間千恵 森下みさ子

やたみほ 山中智省

客員所員

井辻朱美 菊地浩平 白井澄子

松井千恵 宮澤賢治

助手

若谷苑子 遠藤知恵子 南口菜々

客員研究員

生駒幸子

委嘱研究員

木村八重子 竹田修

研究員

相原彩乃 安達愛

石元みさと 伊藤かおり

奥田富美 尾崎るみ

金子真奈美 岸野あき恵

酒井志麻 佐々木江利子

佐々木裕里子 志村裕子

鈴木あゆみ 鈴木律子

ティン、マリア・エレナ

中川理恵子 永島憲江

西村醇子 沼本知自

浜名那奈 半田涼太

柏村裕子 三井彩愛

宮崎麻子 八代華子

山本麻里耶 劉冠玟

和田啓子

準研究員

宇佐美奈麻子 高島香

院生〔博士課程（後期）〕

伊藤かの子 深見けいと

(五十音順)

*事前に、電子公開に同意していただいた方のお名前を掲載しております。

*センター構成員は、右に記した方々の他に、研究員二名、準研究員二名が在籍しております。

編集後記

今号は、新しく着任された先生方やスタッフの紹介を中心にお届けいたしました。ご執筆・ご協力くださった皆様に、心よりお礼申し上げます。また、記事では紹介しきれませんでした。今年度は酒井志麻さんに代わり、若谷苑子さんが助教に就任いたしました。

児童文化研究センターは、児童文学・文化の研究環境の充実にますます努めてまいります。今後とも、変らぬご指導とご厚誼を賜りますよう、お願い申し上げます。

(児童文化研究センター)

児童文化研究センター 夏期開室予定日

～8月3日(月)	9:00～17:00 (平常開室)
8月4日(火)～ 9月16日(水)	閉室
9月17日(木)～	9:00～17:00 (平常開室)

『白百合女子大学児童文化研究 センター研究論文集 30』原稿募集

児童文化研究センターでは、児童文学・文化研究の活性化を目的として、年に一度、研究論文集（査読制）を発行しています。今年度も、以下の要領で『白百合女子大学児童文化研究センター研究論文集 30』（二〇二七年三月発行予定）の原稿を募集いたします。

締切

二〇二六年九月三十日（水）正午必着

提出物

- ① 表紙（論文題目、氏名、構成員の身分、郵便番号、住所、メールアドレス、文字数、投稿区分（研究論文／研究ノート）、申告事項（あれば）を記載）
 - ② 本文（参考文献、注、図、表等を含む）
 - ③ 論文要旨（300 字以内、論文題目を併記）
 - ④ 欧文題目（採用決定後、表紙の論文題目に併記）
- 以上、①～④について、プリントアウト各一部及びデータを提出すること。

提出先

〒一八二一八五二五
東京都調布市緑ヶ丘一―二五

白百合女子大学 児童文化研究センター 宛

データの送付先

(cendo@shirayuri.ac.jp)

研究論文集担当 遠藤知恵子

審査規定（センター規定より抜粋）

- ※ 研究論文集審査のための編集委員会を設置する。
- ※ 編集委員は所長が依頼した、本学専任教員または

投稿規定

- ※ それに相当する者から構成される。
- 投稿原稿は編集委員会の審査を経て、許可されたものが掲載される。

一 執筆者は原則として児童文化研究センター構成員とする。

二 児童文学・文化に関する研究論文、研究ノートを対象とする。

【研究論文】先行研究に加えるべきオリジナリティーのある研究成果が明確に述べられているもの。

【研究ノート】資料の紹介・精査、論点・仮説の予示、既存の仮説の検証作業、研究の中間報告等、優れた研究につながる可能性のある内容が明確に記述されているもの。

三 投稿に際して、審査を希望する投稿区分を明記する。ただし、審査結果によって、区分は変更されることがある。

四 表紙、本文、論文要旨はマイクロソフト社のワードで提出する。

五 本文のフォントサイズは 10 ポイント、用紙サイズは A4 判、文字数と行数は 40 字×30 行となるように設定する。縦書きの場合、用紙の向きは横とする。本文の枚数は 20 枚以内とする。

六 参考文献及び注は本文末に一括する。

七 ※ 書式の細部については *MLA Handbook* 最新版及び過去の研究論文集を参照し、特に欧文文献を引用する際は *MLA Handbook* 最新版に準拠すること。

八 本誌に掲載された著作物の著作権は著者に帰属する。当該著作物は「クリエイティブ・コモンズ表示-非営利-改変禁止 4.0 国際 (CC BY-NC-ND 4.0) ライセンス」及びその後継版のもと、白百合女子

大学学術機関リポジトリで公開する。なお、執筆者がその他のクリエイティブ・コモンズ・ライセンスの選択を希望する場合は、原稿採用後に、その旨を「学術機関リポジトリ「内容記述」記載シート」に記載すること。執筆者が当該許諾に同意しない場合は、その旨を「学術機関リポジトリ「内容記述」記載シート」に記載すること。その意思表示のない場合は、同意したものと見なす。

審査結果発表

二〇二六年十月中旬

注意事項

- a. 完成原稿を投稿する。
- b. 原則として、数字は、横書きの場合は半角英数字、縦書きの場合は漢数字を用いる。いずれの場合も半角カタカナを使用しない。
- c. 特殊記号、飾り文字、不要なスペース等なるべく使用しない。
- d. 図版を掲載する場合、引用要件を満たし、出所を明示する。
- e. 画像は鮮明なものを使用する。高度な印刷技術が必要とする場合は、実費自己負担となることもある。
- f. 学会等で口頭発表したものを投稿する場合は、その旨を本文末に記載する。
- g. やむなく投稿規定を逸脱する場合は、その旨を表紙に記載して申告する。その内容は編集委員会で審議される。
- h. 採用した原稿についての著者校正は初校、再校のみとする。著者校正での誤字脱字以外の加筆修正は原則として認めない。
- i. 不明な点については、研究論文集担当者に問い合わせの上確認する。